専属
ツンメイド
調教されてあげるんだからっ!
小説 千夜詠
挿絵 熊虎たつみ
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

登場人物紹介

Characters

有川（ありかわ）こみな

西日雀家の屋敷に仕えるメイド。小柄で幼い容姿ながら小次郎と同い年。今回小次郎の専属メイドとなる。

西日雀実篤（にしひがらさねあつ）

小次郎の伯父にあたる西日雀家現当主。重厚な威厳を持っている初老の男性。

西日雀清彦（にしひがらきよひこ）

小次郎の従兄弟。小次郎となにかと張り合おうとする。

森田夕貴（もりたゆき）

清彦の専属メイドで、小次郎達とほぼ同年代の少女。

彩野小次郎（さいのこじろう）

諸事情で、繋がりのある西日雀家に住むことになった男子大学生。

深沢涼子（ふかざわりょうこ）

西日雀家現当主・実篤に仕える専属メイド。清楚な雰囲気を漂わせる優しげな女性。

出会いの章　007
第一章　専属メイド　014
第二章　支配される者の想い　057
第三章　繋がる夜　122
第四章　お仕置きと地下室と調教と　160
第五章　この体は全て主のために　224

『第一章　専属メイド』より

「だ、だから、その……女の子とエッチしたり、その、自分で処理したのは……」
「な！　まさかそれって、お、おいそんなこと聞いて……」
「いいから答えて！」
小さな体に迫力だけは姐さん級だ。蛇に睨まれた蛙の状態で、小次郎の防衛本能が勝手に口を滑らせる。
「一週間くらい前に、ＡＶ見て……、って何を言わせるんだ、お前は！　あれ？」
目の前で突然天変地異でも起きたような驚きの顔をなりたてメイドはしていた。
「若いのに、そんなに空いて！　そんな性欲の強そうな顔してるのに？　趣味はエッチビデオの観賞くらいしかなさそうなのに？　超弩級の変態なのに？　ありえないわ……」
「おい……」
メイド少女は俯きながら、じっと何かを考え込み始めた。勝手に一人で表情をコロコロ変えて、その中に笑顔というのは一度もなかったが、理解不能の台詞をいくつも吐いたあとの急な沈黙。この状況にどう対処していいのかわからず、外を眺めればもう暗闇で、しかし彼女を無視して何かを始めることも気が引ける。
不意に、少女は顔を上げた。
「溜まってる……よね……」
ボソッと呟いたあと、彼女はじっとこちらを見つめてきた。両の拳がギュッと握られる。何度目かの溜め息をついて、そこで無理やり表情を消したように見えた。

「じゃ、じゃあ、本来の専属メイドの仕事、させてもらっていい？」
「えっ、なんだよ、急に……」
こみなの眼差しは真剣だった。〝本来の〟という言葉を聞き流していた小次郎であったが、とても掃除や片付けをする前の雰囲気でないとは感じ取れた。これから彼女が何をするかはわからなかったが、断る理由の一つも思い浮かばない。
「あ、ああ……でも、何を……」
やはりこみなの頬は桜色に染まっている。体の震えが見て取れて、いったい何をそんなに緊張しているのかと思った。
「それではこれより、ご、ご奉仕、させていただきます」
彼女の唇から発せられたのは、小次郎の印象とは違うきちんとした挨拶と口調だった。
「ああ……。いっ！」
深々とこみながお辞儀をした瞬間だった。メイド服の広くて深い襟が下がって、その隙間から見えてしまう。緩やかな膨らみしかない微乳の雪白の峰が露になって、そして、
（ち、乳首ぃ……っ！　そんな、見えてるって！）
ツンと愛らしい桃色の突起が、背徳的な形状に濃厚な牝香を滾らせ、そこにあった。
（ノーブラ……！）
目を背けるのを忘れてしまう。いや、お辞儀をした俯く姿勢でこちらを見ていない少女に対しての確信犯だった。疼き始めていた分身が、視覚からの刺激に奇襲されて、股間を

はっきりと張り詰めさせる。だが、こみなの小柄な体が微かに震えているのを見取ると、きゅんと胸を締め付ける罪悪感が湧き起こった。

（あいつ、まさか……わかってて？　なんで？）

ゆっくりと魅惑的な上体が起こされ、再び瞳が合った直後、彼女は恥ずかしそうに一瞬だけ視線を逸らした。

「じゃ、じゃあ、これから、するから……」

ゆっくりと近付いたこみなは、ベッドに腰を下ろしている青年の前で跪いた。真上からメイド少女を見下ろすと、乳房未満の膨らみと、それゆえに目立ついやらしく尖った乳首が先程よりもはっきりと確認できる。

「え、え、えっと、いったい、何をなさるんでぇ？」

ドキンと鼓動が鳴って、声が上ずってしまう。

「私が……さっき捨てたあれの代わりになるのよ。これが、専属メイドの仕事。さっき、オ、オナニーなんて、する必要ないって、言ったでしょ。アンタは自分でしなくていい。私が、その、するから」

劣情が理解させた。口内に唾が溢れてしまいゴクリと音を立てて飲み込んでしまう。喧嘩相手にしかならないと思われた少女がいやらしいことをすると言った瞬間に、人形のように思えた彼女が、妙に生々しい存在に変化して、美少女の鼓動も体温も感じられていく気がした。

（これじゃあ本当に、あれで見たままの世界じゃないか）
期待が膨らんでしまっていた。同時に湧き起こる罪悪感。そんな気持ちを抱かないようにと選んだ相手が、あろうことか自分から男の性欲を満たしてくれると言っている。こんなこと許されるのか？　だが、劣情に金縛りにされて動けない。
か細い腕が小次郎の股間を広げてくる。力弱い押しにまったく抵抗できなかった。
「こみな……。ほ、本当にこれが仕事なのか？　いや、そうだとしても、こんな、急に」
「溜まっているんでしょ。ア、アンタに勝手に抜かれたら困るの。専属メイドの仕事は、仕えた主人の性欲処理なの。アンタの命令に従って、どんな恥ずかしいことでもして、満足させなきゃいけない。もし仮にアンタが自分で扱くとしても、私にいやらしいことを命じなさい。それで私の体に放つの。さっきみたいのなんかで抜かれたら最悪。私のいる意味がなくなっちゃう。お給料だって、減らされるんだから！」
捲し立てるようなきつい口調ながら、縋るような瞳を向けてくる。
「こみな……」
膨らみきった股間が彼女の瞳に捉えられている。伸ばしかけた少女の手が、触れる手前で瞬間止まり、
「べ、別にアンタのこと、好きでもなんでもない。仕事だからするんだから、勘違いしないでよ」
「好きじゃないならよせよ。したことに……しとけばいいじゃないか」

「無理だってば！　御当主様に聞かれるの。具体的にどうしたか。想像で、答えられない。……したこと、ないんだもん」
恨めしそうに泣きそうに、上目遣いで見つめてくる。顔はさらに真っ赤になって、もうこれ以上困らせないでと言っているようだった。
しなやかな白魚に喩えられる手がズボンの中心に優しく添えられた。
「あ、あ、あ、こ、こんなに……や、やだ大きい」
自身の言葉を証明するようなうろたえをメイドは見せた。それでも気の強い彼女は、その小さな手で、強張った肉塊の形状を確かめるように緩やかに上下させる。ゾクゾクと優しく嬲られる刺激が、そこから波紋のように全身に広がってきた。男の本能がこいつに種付けしろと焚きつけ、興奮に呼吸の乱れが生じてしまう。
「か、硬いんだ……。やっぱり、本物も……」
「本物って、まさか、お前……」
言いかけた瞬間、射殺すような瞳で睨まれる。
「模型で練習させられたんだから！　自分から変な物持ちたがるわけないでしょ！」
「ひいっ、わかったから……そんな、怒るなよ」
「あ、ご、ごめん……。あ、あの、本当に、は、初めてだから、その、できればもっと具体的に、どうすればいいか……命令して」
眉を顰めた羞恥顔に、初めて聞いたしおらしい声。こんな一面もあったのかと思い知ら

され、ドキッと鼓動が跳ねた。
「えっと、じゃあ、まずベルトを外して……」
メイド服の装着に比べれば、男のズボンを脱がせることなど造作もないだろう。ただそれでも緊張と恥ずかしさのせいか、指先は常に震えたままだった。チノパンの下から現れ出るボクサーパンツ。くっきりと肉棒の形状が浮かび、逞しい盛り上がりに興奮と淫楽への期待が示されている。
「じゃあ、下着を脱がせてくれ」
「う、うん」
ボクサーパンツの上に小さくて繊細な指先がかかり、ゴムが引き上げられる。ギュッと一旦瞳をきつく閉じた彼女は、そこからゆっくりとズリ下げていった。
小次郎の男が外気に晒される。少女が戸惑いがちに瞼を開く。
「あ、ああ、あ、こ、これが、本物……」
着衣の圧迫から解放された小次郎の分身は、その幹に毒々しく血管が浮き上がり、視線と可憐な少女の甘い息遣いを浴びて凶悪にそそり立った。カリ高く亀頭はパンパンに膨らみきって、荒々しい男を誇示している。
「おっきくて、変な臭い……。ムンとして、熱そう……」
入浴前の汗臭さが少女の美顔を犯し、ヌラつく先端が欲望を正直に表していた。
本当に初めて見たのだろう。だからこそ彼女は瞳を逸らせない。驚愕に思考が追いつけ

ず、眼前にそそり立つ逸物がいったい何なのか、答えを導き出すのに時間がかかる。可憐な美少女の大きな濃紺色の瞳に肉棒が映りこむ様子と、初心な反応を見せ付けられて、彼女の前でピクンと強張りを跳ねさせてしまった。

「きゃ……っ！」

からかわれたのかと思ったのか、少し頬を膨らませて睨みつけてくるこみな。

「な、なんか可愛いぞ、お前……」

「な、な、な、何言ってるのよアンタ。ば、馬鹿じゃない」

満更でもないらしい。ぷいと横を向いてしまったが、照れくさそうにしているようにも見えた。

（性格はともかく、可愛いのは間違いないんだよな。こんな子を俺は……）

恋人同士なら感動の瞬間なのだろう。しかし今は可憐な顔立ちをした晩生（おくて）な美少女がまだ出会ったばかりの相手の肉棒を仕事のためだけに愛撫する。それをさせるのが自分だということに憤りを感じた。それでも欲望が止められない。

桜色のぷっくりと柔らかそうな唇が見えた。

「こみな、えっと、その……な、舐めて、くれ」

性的行為を初めて命令したその瞬間、顔がカーと熱くなってしまう。ここでようやく小次郎は気付いた。エッチな命令をするということは、自分がして欲しい劣情を告白するようなものではないか。

横を向いていたメイド少女も、ハッと気付いたように視線を牡自身に戻し、切なげな顔を見せる。
「う、うん。じゃあ、するから」
愛らしい唇が開いて、そこから既に唾液に塗(まみ)れきった赤い舌ベロが伸ばされていく。あどけなさを残した顔がさらに近付いて、ふにっ、と先端が幹筋に触れた。
(こ、こみなが、俺のあそこを……)
自分で命令しておいて、今行われている事実に感動と興奮を覚えてしまう。彼女の大きな瞳が細められ、中心の濃紺色が潤みきっているように見えた。
れろぉ……。ふにゅふにゅと愛らしい舌先がカリ首の下の辺りを優しくつつく。
(うわぁあ、生暖かくて、おお、ぬちゃぬちゃが、いい)
意識が局所に集中していた。美少女の唾液に湿らされて、強張りがまたピクンと跳ねる。粘膜の接触面が徐々に増えて、初め遠慮がちだったベロの動きにも僅かに力が込められていた。尿道の膨らみに舌腹を丹念に這わせるメイド少女の姿は牝犬のようで、はぁはぁ、と直接当てられる熱い吐息が心地良く肉棒を包んでくれる。
「ど、どお？　その、ちゃんと、気持ちいい？」
「あ、ああ、上手いじゃないか、こみな」
「そ、そう、よかった。練習通りに、できてるみたい……」
小次郎の男全てを唾液に塗れさせようと、こみなは顔を斜めにさせながら側面に舌先を

『第三章　繋がる夜』より

慌てて手足をバタつかせたメイド少女の動きがピタと止まった。力が急に抜けてしまったように背中から身を預けてくる。横からの上目遣いで恨めしそうに見つめてきた。
「覚えてらっしゃい。夜中こっそりアンタの額にZって書いといてあげるから」
どこまで本気なのかと考えながら、こんな言い草さえ可愛く見えた。
「そういう口の利き方も直してやるからな」
小次郎はニッと笑った。
「なっ、なによそれ……ぁひゃっ！」
瞬間、ピクンとこみなの身が強張った。腕を伸ばして愛らしい乳房に触れたその時だった。触れてみて初めてわかる。少女の腋の下付近から緩やかながら脂肪がついていて、張りと柔らかさの絶妙な感触は、むしろ自分の指先の方が愛撫されているような気持ちよさだった。
「俺を信じろ。ちゃんと調教してやるから」
「ば、バカぁ……ふざけたこと言ってると、ぁやん！　はぁあ……」
膨らみ始めのような健気な微乳は感度がよく、優しくムニュと下から寄せるように揉んでやるだけでピクピク反応を見せてくれる。密着しているとその痙攣したような震えがダイレクトに伝わって、股間の上で少女のお尻が浮いたり擦り付けられたりを繰り返した。
「あは、ひゃうん、はっ、はあはあ……」
包み込んだ美少女の小柄な体がモゾモゾと動いて柔らかな優しい刺激を与えてくれる。

「こみなの体、気持ちいいよ」
「は、恥ずかしいこと言うなぁ……」
照れくささの中に嬉しさを滲ませているようだ。行動や体の反応だけはずっと素直なのだが、自分の言葉でそれを表現するのはまだまだ不得手である。
「もみゅもみゅされて、気持ちいいか？」
「そ、それは……あふ、ああん、はぁ……」
指先で小さな乳房の弾力を愉しみながら、口を彼女の耳元に近寄らせる。熱く息を吹きかけるように囁いた。
「命令だよ。言いなさい」
「こんな時だけ主人面してぇ……っ、い、言えばいいんでしょ。んっ……」
メイドは羞恥を桜色に染まった頬に表している。主人はぷっくりとした唇をじっと見つめていた。
「き、気持ち……いい」
横目でニヤニヤ笑っていることに気付かれたのか、こみなはプイと反対方向を向いてしまう。体が一段と熱くなった気がする。よほど恥ずかしかったのだろう。
そんな隙をつくようにエプロンの下に腕を潜り込ませた。辱めるような意地悪な気分も興奮と共に湧いて、素早くボタンを外し、生地の縁を掴む。
「ちょ、ちょっと、やん、だ、ダメっ！　出ちゃうぅ！」

ぐいっと左右に開きながらエプロンをずらした。白い微乳の柔肌が外気に晒され、ツンと感じてしまっている桜色の乳首が少し上向いて起っている。
「あわぁ、ダメだって、言ったのにぃ……」
恥ずかしさに縮こまり、締められた腋で微乳が寄せられる。ささやかな隆起の陰影は彼女の人形のような可憐な顔立ちと相まって背徳的な気分を高めさせた。造形物のような完成された美しさを感じる。なのに汗ばんだ少女香を備えてどこか淫靡で、彼女の体付きは十二分に牝を感じさせているのだ。
「綺麗で、凄くエッチだ、こみなの体……」
確かに肉付いた尻房のワレメに挟まれるように肉棒の硬直と膨張が増していく。
「はあっ、そんなこと言ってぇ……」
ぷんぷんしながらも声に艶やかさが含まれている。
「こみなの体は、きっともっとドスケベになる。ほら……」
小さな乳房を掌で包みながら指間に乳首を挟み込む。
「あふっ、んっ……こ、こんな場所で、あっ、ああん、こんな、こと……」
柔らかな乳肌は指先と掌を吸い寄せるようで、揉みしだきに歪んでいやらしく形を変えた。硬く痼(しこ)っていた乳首が目の前で突起をさらに伸ばし、発情した猥褻物へと変わっていく。
「これからは毎日揉んで、貧乳を大きくしてやる」

正直なことを言えばこみなのこのサイズも可愛らしくて好きなのだ。
「ば、馬鹿にして……あは、やあん……はあ、はあ……」
感度のよさを示して、後ろから抱きしめた体がゾクゾクしているように震え続けている。愛らしい呼吸が深く乱れ、両手で掴み取った胸が上下に揺れた。肢体の硬直と弛緩の波が差を大きくして、横から見つめてあげる潤んだ瞳が弄られる愉悦に細められていた。
「こみな……股を開いて……」
「へ……⁉　や、やだ！　そ、そ、そ、そこ、ああん、ダメぇえ！」
片手で少女の体を揉み解しながら、もう片方の手を太股の内側に潜り込ませていった。素直じゃない恥ずかしがりやは男の膝の上でぎゅっと両脚を閉じて、女の子の大事なところを守ろうとする。
「俺にされるの、イヤ、か？」
「し、仕方ないから、はぁはぁ、されて、あげるけど、あん、こんな場所じゃ……、そこまでされちゃったら、あ、あはぁあん、抑えられなくなっちゃうからぁ！」
気持ちの揺れ動きを思わせるように、両脚は閉じていてもそれは力弱く、自由になっている両手の抵抗もない。そんな時はこの一言が効くようだ。
「頼んでいるんじゃない。命令だ」
「あう……うう……、調子にのって、す、好きにすれば……」
両手を後ろから伸ばしてむっちり牝然とした太股を捉えた。メイド服のミニ丈の内側は

どこよりも熱く、蒸れた湿気が篭りきっている。こみなは口元に軽く握った拳を当てて、少し泣き出しそうな顔で股が開かれる瞬間を待っていた。

「はあ、はあ……、あん、やだ……」

ぐぐっと少し力を込めただけで、美少女の秘密は開かれる。時折吹く風が裾を揺らし、彼女の体から牝の匂いを立ち昇らせた。男の両手が太股の内肉をねっとり撫でて中心部へと這い進む。

「この先が、こみなの一番いやらしいところだ。ん？」

鼠蹊部の間近に迫って、ぬちゃ、と指先に滑る感触を覚えた。メイドの真っ赤になった横顔が俯いて、強い羞恥を示して体中を震わせる。

「だ、だから、ダメって……、私はちゃんと、そう……言ったんだから……」

熱い太股に発情した牝の露が滲んでいた。ぬちゅぬちゅした液体が絡みついてくる。

（えっと、ここまで溢れ出している、ということは……）

濃厚に蒸れきった美少女の股間。その艶肌を指先の滑りに任せて這い進ませる。

「あひゃん！　そ、そこ……ゆ、指が、あ、当たってきちゃうぅう！」

ぬちょ！　ぬちゅぬちゅ！　メイド少女のお尻と股間に張り付いた薄布はもうたっぷりと淫蜜を染み込ませ、ぐっしょりと全部濡れきっていた。

「おお、もう……こんなに……」

「ば、バカぁ！　言わないでよぉ……。うう……」

しっとりと粘性のある発情水を含んだ薄布をなぞる。指先に淫蜜を絡ませながら確かめると、ワレメだけを覆うくらいの小さなショーツだった。
「エッチなの穿いているね」
「あふ、はあ、だ、だって……あひ、やん……アンタが、クマさんって、馬鹿にするから、あ、あん！」
いじらしい乙女心を微笑ましくも思うが、逆に嗜虐的な欲望も湧いてしまう。
「こんなにいやらしく濡らしちゃうのに、こんなに生地が薄くて少なくっちゃ、吸いきれないだろう。いっそのこと、オムツでもしたらどうだ？」
薄布の上から微かに盛り上がった土手肉を摩ってやる。そこからでも、ねちょ、と牝蜜は指先を濡らしてきた。指先にささやかに生えている恥毛を感じ、ふと邪な計画を思いつく。
「ああん、やだやだぁ！　そんな趣味まであったのぉ？　変態ぃい！」
「まだ、そんなこと言うのか。お仕置きだ」
濡れショーツ越しのワレメに中指を添わせ、その上部から親指を近付ける。グリ、グリ！　と捉えた突起物を押さえ、
「そっ！　そこっ！　弱いの、ダメなの、敏感なのぉ！　ダメ、ダメぇえ！　ひっ！」
ギュッと摘み上げた。
「ぁひいっ！　やはぁあん！　お豆が、お豆がぁああ！」

身を硬くしてビクビクと震え、苦痛に眉寄せる麗顔。堪らず両手で男の腕を掴み、必死で身悶えお尻でもがき、その柔肉で肉棒をズリ擦り続けた。
「あはぁああん、お豆潰れちゃうぅぅ！　もう言わないからぁあ……っ。や、はああ、来ちゃうぅぅ！　何か来ちゃうぅぅ！」
指間にヌチョヌチョが生暖かく広がっていく。ビクンビクンと小次郎の膝の上で小柄な体を跳ねさせて、
「あんんんぅっ‼」
淫蜜はお漏らししたように彼のズボンにぬらぬら滴った。
（まさか！　こみな、今ので……）
指先の中で大きく膨らんだ肉芽を離してやると、どっと疲れたようにまた身をしっかりと預けてくる。はあ、はあ、はあ……。愛らしく熱をはらんだ吐息を奏で、表情は余韻を愉しむように頬桜色に染めて蕩けていた。
「こみな……イッたのか？　お前、マ……」
「ち、違う！　……ちょっと、はぁ、はぁ、そこが、感じやすい、だけだもん」
本心を隠すように視線を反対方向に向けるメイド少女。顔全体が真っ赤になっていき、言葉と裏腹に反応はわかりやすい。ふふん、と笑って片手を彼女の股間から抜いた。
「虐められて、こんなにぐしょぐしょに濡らしたくせに」
ぺちゃ！　淫蜜に塗れきった掌を微乳に叩きつける。

「ひゃん！　や、やだ……エッチなお汁が、こ、こんなに……あ、あはぁ……」
揉みしだくごとに、くちゃくちゃといやらしく音を響かせ、ぬらぬらと乳房が愛液に塗れて光沢を持っていく。天然の蜜ローションが掌と微乳の間でねっとり糸を引いて、華奢な肢体が卑猥に染め上げられた。
「ほら、どうだ。こみなはドスケベだろ？」
「あふっ、はあ、違う、ってばぁ、あん、指が中に、や、やん、入ってぇっ」
ぬちゅうぅぅ……。ショーツの下縁に指先を合わせてぷにぷにした土手肉を軽く圧す。淫蜜の泥濘になったその熱い場所に潜り込ませると、すぐさま肉が割れて中心に押し込まれた。ぐちゅ！　ぬちょぬちょ……。
「ぁふうぅう、らめ、らめぇえぇっ！　ワレメがぁ、指に、感じすぎちゃうぅうううっ！」
初めて触れたこみなの女は、沸騰しているように熱くて、ぬちゃぬちゃした柔らかい肉ビラの感触が指先に快感を覚えさせた。そこに意識が集中してしまい、弄びたくなる。
きっと一度軽いアクメを味わったはずだ。ただでさえ感じやすい彼女の卑肉が指先の些細な蠢きに対して鋭敏に反応し、ビクビク！　小次郎の胸の前で肢体が小刻みに躍る。
（凄い。こんなに感じて……。でも、敏感すぎ……？）
濡れて肉皮に張り付いたささやかな繊毛を摩り、中指は縦筋の内奥を堪能する。くちゅ、ぬちゅ、ちゅぷちゅぷ……。薄い肉ビラが指先を挟み込み、弄ばれるままに震えていた。ぬとぬと淫蜜が滴り続け、ねっとりと男の太股を濡らしていく。

『第四章　お仕置きと地下室と調教と』より

ぐったりした愛メイドの縄と首輪を外してやってお姫様抱っこでベッドに運ぶ。薬の効果は薄らいだようだが寝かしつけるとまだモゾモゾと内股を擦り合わせていた。甘えたような瞳が見つめてくる。

「小次郎様……、服をお脱ぎになって」

全身で奉仕したいのだと言うように彼女は両手を伸ばしてくる。狂乱した痴態を見せ付けられて、こちらの股間はかなり窮屈な状態になっていた。

「ああ、俺も気持ちよくなりたい」

さすがにさっきのは効いたのか随分と従順でしおらしい。可愛い奴だと思いつつ、気取った感じで見つめながら全てを脱ぎ捨てる。仰向けにベッドに横たわった美少女に覆い被さるようにしていった。

「さあ、小次郎様……」

潤みきった瞳に誘われて体を重ねていく。あどけなさと妖艶さを併せ持ったメイドの片手が青年の首に回り、もう片方の手が灼棒に辿り着いた。くちゅ、ぬりゅ……。

（あれ……？）

妙にぬるぬるした少女の小さな掌の感触。確かに気持ちいいのだが、それは愛液や汗の湿りとは違うような気がした。

「ふふ……っ」

こみなは悪戯っ子の笑みを浮かべていた。嫌な予感に表情が固まった気がする。顎を引

いて自分の逸物を確認した途端、慌てて飛び退いていた。
「うわぁ！　こ、こみなぁ……。まさか、お前……」
体を起こしたメイド少女の手に握られていたのは、あの薬瓶だった。瞳と口角が吊り上がり、してやったりと微笑んでいやがる。
（や、やられた！）
いきり立った肉棒全体にクリーム状の薬がべっとり塗られていた。
「散々な目に遭わせてくれたお返しよ。どう、もう効いてきたんじゃない」
「な、何言って……。あれは、お仕置きだろ。うっ、くううう」
じんじんと男根が熱くなって、亀頭が真っ赤になって腫れ上がる。痺れを伴ってピクンピクンと跳ねてしまい限界を超しても膨張しようとする痛みに似た感覚がどうしても心地良かった。
「はあ……ぁ、小次郎のが、凄いことになっちゃってるぅ」
嬉しそうに瞳を細める小悪魔。見つめられるうちに、じわじわと熱さが痒みに変わりだし、それを握り締めずにはいられなくなった。
「や、やばいぞ、これ……」
「心配いらないんでしょ。体に、いいんだよね。それに……」
発情状態が続いていることを教えるように彼女の頬は桜色に染まっている。ベッドの上で見せ付けるように股間を開き、汗と淫蜜とおしっこで濡れきった淫裂にメイドは指先を

添わせた。
「痒くて擦り付けたくなったら、ここを使って……。ねっ」
繊細な人差し指と中指が蜜濡れながらパックリとワレメを押し広げた。充血した赤桃色の粘膜が露にされる。ぐちょぐちょに濡れて光沢を発し、篭っていた甘酸っぱい発情牝の香りと共にねっとりと牝汁が滴り落ちた。彼女の指先さえ窮屈そうな小さな肉壷が喘ぐようにヒクついて、強烈に求めている。
「はぁあ、こみなの、オ、オマ〇コの孔で、小次郎のオチンポを、はぁはぁ、掻いてあげるから」
「くっ、うう、どうなっても、知らないからな」
いろんな意味でもう我慢なんてできない。押し倒した瞬間、ジーンと感じたように口元を緩めるこみな。パンパンになった肉棒の先端を濡れそぼったワレメにあてがった。
ぐにゅ！　縦筋の切れ込んだ無毛の肉裂が強張りの形状に沿って割り開かれる。
「くっ、は……ぁっ、そ、そのままぶち込んでぇええ！」
ぐにゅっ！　メリッ！　ずぷずぷぷぷ！　仰向けのメイドに体を重ねながら、腰を一気に押し込んだ。少女の眉根が上がり、微かな苦痛を滲ませる。だが、
「ひっ……っ！　ふあっ、はあっ、あああああ、す、凄いのが、入ってくるぅううう！」
刹那で蕩けて、嬉しそうに見つめてくるのだ。
ヌズズズ！　亀頭が肉壷に減り込んで、ぷしゃ！　牝汁の飛沫をあげさせて捻じ込まれ

る。膣道を拡張される痛悦に少女はビクッと仰け反って背を跳ねさせた。
（うお、腫れているせいか、い、いつもより、ぐいぐい締め付けられて、おお……）
牝内に包み込まれた部分が本当に癒やされるように痒みが薄らいでいく。だが怒張を進攻させれば心地良さが広がって、浮腫（むくみ）は一層増していった。
「いやぁん、大きすぎる……ぅ。はぁ、ああ、こみなのオマ〇コ、こ、壊れちゃうぅう！」
喘ぐ表情に悦びを滲ませている。ド助平メイドの想いそのままに膣肉がしっとり強張りに纏わりついて内ヒダがさっそく舐め回してきた。
「はあ、はあ、こみな、お前の中を掻き回したい。もっと奥まで、全部」
すっかり従順な牝メイドの顔つきになったこみな。無理やり乱れさせられ、惚けて熱をはらんだ様子で、心から貪欲に快感を求めている。
「はぁはぁ、む、むちゃくちゃにしてぇえ！　小次郎、様のオチンポで、はうっ、はぁはぁ、オマ〇コも子宮もぐちゃぐちゃに壊してぇええ！」
きゅるきゅる衝え、肉棒を吸い込んでくる奉仕膣。ヌズズズ……。小柄な肢体を貫くように、吸引されるままに牝奥に怒張を押し込んだ。
「くっ、はあ……っ、ああ、お腹が裂けちゃうぅううっ！　いいっ！　いいのぉおっ！」
子宮孔を抉る。内臓から破壊されるような痛悦に歓喜するマゾメイドは、両腕を主人の背中に回してしっかりと抱きついた。大きな涙ぐむ瞳を細めた可憐な喘ぎ顔が間近にあって、嗜虐の興奮のまま貫通させる。

ぬぷっっ！　ぢゅず！　ずん！　ぢゅぷぷぷ！
「ひい……ぃ！　凄いぃいっ！　奥の奥まで、ふあ、はあ、小次郎様に奉仕してるのぉおっ！　こみなの全部、小次郎様のものぉ……っ！」
悦びのまま身悶えて、主人の背中に爪を立ててしまう淫乱メイド。大きく広げられた両脚が、汗ばんだむっちり太股で彼の腰を摩り、男の体に絡みつく。柔らかな小振りの乳房が押し付けられて、コリコリしたツンと起った乳首が小次郎の胸元を突いてきた。
（絡みあうような、ドスケベなセックスを……）
一つに溶けあいたい。その欲求のまま男の腕が少女の背に回され、強く抱きしめるように流れた。
「ぁはあ、はあ、はあ……オマ〇コ熱くなってきちゃう。堪らない。堪らないの……ぉ！」
強張りについていた薬が牝の内粘膜に伝って染み込んでいった。結合部がじんじんと痒熱を発し、激しく擦りあわなければ狂いそうにその感覚が膨張してしまう。
「ふあ、はあ……、はあ、はあ、ズンズンしてぇえええ……っ！　こみなのオマ〇コと子宮をむちゃくちゃに虐めてくらさいぃいいっ！」
淫熱に酔いきった表情で強く求めてくる。少女の閉じきれなくなった唇の奥には唾液が溢れかえって、口端からだらだら涎が漏れていった。ド淫乱な奉仕牝の本能だけに動かされ、彼女の腰がくねりだす。ぬっぷっ！　ぬぶぶっ！　淫乱な腰振りが青年とベッドの隙間で行われた。本気で痛めつけて欲しいように、メイドのお尻がギシギシと古いベッドを

鳴らしていく。

「こみな、お、俺も、止められなくなる。くううっ」

ぬぢゅっ！　ぢゅぷぢゅぷ！　強烈な欲求のままピストンを繰り返した。ぷしゃ、ぷしゃ！　怒張と肉壷の結合部から大量に牝汁を吹き上がらせて、古いシーツに濡れ染みを広がらせていく。

「ぁひい……ぃッ！　子宮にぶち当たっれっ、壊ひゃれちゃうぅうう……っう！　もっとぉ、もっろおお――おっ！」

深く激しい突き込みで、膣内壁をカリ首が舐め削いでいった。ぬちょぬちょの柔らかな粘膜ヒダが媚びて纏わりつく。締め付けながら吸い付いて、男と快楽を逃そうとはしない。柔らかな肢体が汗まみれになって、メイド服がグショグショに濡れていた。

「うおおお、こみな、止められない、止めたら、狂っちまう」

少しでも動きを止めたら強烈な痒みが襲ってくるようになった。苛烈に擦り付ければ極上の名器による肉悦が与えられる。だから一層激しく腰振って、蜜壷から、ぷしゃぷしゃ、牝汁をしぶき上がらせる。

「あふあ……ッ、はあっあぁ、こんらの、はぁはぁ、ずっと欲しかっらから、も、もう、ぃ……っ、イクぅううう！　我慢れきないぃいいい！　イク、イク、イクぅううううっ！」

子宮に叩きつけるたびに、抱きしめる姿態がビクビクと跳ねる。メイドの両手が男の背中で強く力が込められ、濡れきった膣肉が激しく顫動を繰り返した。急激な射精欲求の高

まり。腫れきった肉棒がズズッとまた突出したように膨れて、
「こみな、あああああ、出る、出るぞぉ！」
びゅる！　どぴゅ、どくどく！　子宮の奥を強烈に叩いたその瞬間、怒張の先端から濃厚な白濁水が一気に噴出した。
びゅっ、びゅるびゅる！　大量に注ぎ込んでいく。
「あああ、はあああ、あちゅいのがあああ、いっぱい、いっぱっ……入ってくるうぅう！　子宮っ！　はあああっあ、気持ひいいい……っ！」
びゅくん、びゅくん、と強張りがまだ中で跳ね躍る。
（凄い、快感だ……。はあ、はあ、んっ、んん⁉）
肉棒はずっと強張ったままだ。そしてまだまだ疼く。はぁはぁ、と自分の下で甘く激しい吐息で呼吸を整えるメイドは恍惚に酔いしれていた。だが小次郎の牡は彼女の中で欲望を募らせている。
（あ、あんなに、気持ちよかったのに？　いや、良すぎて、癖に……。薬のせいなのか？）
とろんと半開きになった瞳で、甘えた目つきで見つめてくるこみな。
「はぁはぁ、ど、どうしよう、離れたく……なくなっちゃったよ。あふ、うんっ、こんなに激しかったのに……」
貪欲な牝腰が蠢きだしている。男を放さぬように膣肉がきゅるきゅると締め付けてきて、引き裂くように広げられた熱いワレメからぬちゃぬちゃ牝汁が滝のように流れていった。

（このままずっと、こみなとエッチし続けたい）

愛情と劣情の想いのまま、ぐちゅ！　ぢゅぶぢゅぶ！　猛烈に牝芯を掻き乱す。

「ふあっッ、ああっ！　ふひゃっ！　ふあっ、はあ……っ、す、すぐ来ぢゃうぅぅう……っ！　ぢゅんぢゅん、ぐるぅううっ！　きひゃうっ！　きひゃうぅっうううっ！」

アクメを味わったばかりの鋭敏な卑肉があっと言う間に昇り詰めていく。熱く滾った肉棒が牡液をぶちまけられた膣肉をぐちゃぐちゃと震わせ、先端が果敢に子宮を叩き続けた。

「こみな、ああ！　何発でもぶち込むぞ！」

柔らかな女肉と密着して、牡と牝の汗が混じりあう。舌を伸ばして美少女メイドの首筋をぺちゃぺちゃ舐めていた。しょっぱさのある甘露。舌先の感触に身悶えして感じる女体。全身が熱くてほのかな局部の痒みと膨大な性感の心地良さだけに包み込まれていく。

「いいぃっぃ……っ！　出して出して出してぇえぇ――えっ！　こみなのお腹がいっぱい膨れるくらいにぃいっぃ、ふあっ、あはぁあ、小次郎様の精子で満たしてぇえぇえっ！」

奉仕を忘れないメイド肉。ぬちゃぬちゃと膣ヒダが顫動しながら肉茎に纏わりついて、全身が男の肌を味わうようにくねり動く。愛らしくもいやらしいお尻は欲望に忠実に、我が儘に振られていた。

（うおお、凄い。出したばかりなのに、うっ、も、もう……）

吸い付かれて、吸い込まれるような感覚が肉棒を悶えさせて、腫れ上がったカリ首が子宮孔の辺りで暴れ回った。

「ぁひいいぃい！　そこぉっ！　狂わしゃれっ、るぅうううっ！　ぐしゃぐしゃにされれ、飛んれちゃうぅうう……っ！」
ぬずん！　ぬぷっっ！　ぢゅぷぢゅぷ！　小刻みなピストンと深い前後運動を繰り返し、どんどん募る射精の欲求。我慢する必要などない。我慢なんてできやしない。
「ほらほら、また、くっ、ううう！　注いでやるよ、こみな！」
どびゅる！　どぷどぷ！　跳ね回る強張りの動きに合わせるように、媚態がビクンビクンと男の下で震え躍った。
「熱いぃい！　まらイグぅうう！　イグっ、イグ、イッちゃうぅうう！」
小振りだが弾力のある乳房が押し付けられるように彼女の背が仰け反った。恍惚したイキ顔が青年の横で上げられる。二人ともぐっしょりと全身が汗まみれになっていた。結合部から、ねっとりした白濁の混じった淫水がぐちゅぐちゅと漏れている。
「はあ、はあ、はあ、まだ……やめられない……」
恍惚としながらも、少女の貪欲に求めてくる瞳を見つめると、体から滲み出たものをまた溢れてくるもので流したくなる。
まだイッている状態のメイドを突き続けた。狂っても、狂わせても構わない。
ズン！　ヌププッ、ズチュ！　発射状態の収まりのない強張りを抉りこませたまま、枯れるまで性の狂乱を二人で極めたい。
「うお、おお、こみな、ずっと、このまま、俺について、きて……」

「あはぁあああ、イク、イクぅうう！　ついて……ついていくぅううっ！　らから、っあ、はあ……あっ、突いてぇっ、もっと突いてぇえええっ！」
ヒクヒクと怒張にしゃぶりつく膣孔から、ぷしゅ、ぷしゅ！　と白濁混じりの牝汁が飛沫をあげ続けた。ベッドシーツの全面が汗と淫水にぐっしょり濡れて、猥褻な獣の臭いに地下室が満たされていく。
「あああああ！　イッれるのに、イッひゃうううう！　イグうぅうううッ！」
ビクッッ！　ビクビクッ!!
激しい快楽の痙攣を起こし、抱きついてくる腕に力が込められる。涙の溢れた少女の瞳が白目を剥く。それでもメイドの本能が奉仕を続けさせ、くねりを止めない腰の動きが、ぢゅぶぢゅぶ、と濡れた猥音を響かせた。
ドプッッ！　ドビュルルッッ！
抜かずの連続発射で増す滑り。その勢いに煽られて、ぷしゃあああ！　と結合部から潮を吹いた。
「はあああ！　焼けひゃうぅうう！　子宮が燃えちゃうのぉおお！」
理性をなくしたようなイキ顔では、大きく開かれた唇からだらだら涎が漏れていく。男の背中に爪痕を残した両手から力が抜けてゆっくりと離れた。絡みついていた両脚も降りていき、失神したように横たわる美少女メイド。
「はぁはぁ、こみな……、だい、じょうぶ、か……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/